

要望演題 | 3-01 その他

## 要望演題13

## 右室流出路再建

座長:

麻生 俊英 (神奈川県立こども医療センター)

西垣 恭一 (大阪市立総合医療センター)

Sat. Jul 18, 2015 9:00 AM - 9:50 AM 第4会場 (1F ジュピター)

III-YB13-01~III-YB13-05

所属正式名称: 麻生俊英(神奈川県立こども医療センター 心臓血管外科)、西垣恭一(大阪市立総合医療センター 小児心臓血管外科)

## [III-YB13-04] fan-shaped ePTFE valved conduit with bulging sinus のさらなる進化を目指して—新型導管の有効性に関する検討—

○山本 裕介, 山岸 正明, 宮崎 隆子, 前田 吉宣, 加藤 伸康, 浅田 聡 (京府立医科大学小児医療センター 小児心臓血管外科)

Keywords: 右室流出路再建術, ePTFE製3弁付き導管, 新型導管

【背景】右室流出路再建術に用いる人工弁素材として我々が作製する ePTFE製3弁付き導管について、当初は ePTFEグラフトを長軸方向に切開して bulging sinusを圧出形成、弁尖を縫着後に導管状に再縫合するという方法を用いていたが、小口径導管の作製が困難である・導管形状が真円となりにくいなどの問題点を認めため、2010年に導管を切り開くことなく作製する方法を開発、以後新型導管として使用を開始して現在に至る。【目的】旧型および新型導管の臨床成績を比較し、新型導管の優位性につき検討する。【方法】2002年~2009年作製の旧型導管および2010年以降の新型導管を対象として国内各施設からのアンケート調査をもとに追跡調査を行い、臨床成績と弁機能の評価を行った。弁機能については、旧型では3尖弁としては作製不能であった14mm以下の導管を除外し、口径16-24mmの導管を対象として比較検討を行った。【結果】旧型群は270例、新型群は294例で14mm以下の小口径の割合は旧型群で4.4%、新型群で43.2%。手術時年齢・体重は旧型群で8.0±8.1歳・23.4±18.6kg、新型群で6.5±8.3歳・18.5±16.4kg。平均観察期間は旧型群3.7±2.2年、新型群1.5±1.1年。弁関連死亡はいずれの群にも認めず、弁不全に起因する再手術は旧型群で1例(術後5.3年時に導管狭窄に対するPVR)、新型群で2例(成長に伴う相対的狭窄)を認めた。moderate以上の弁逆流を示したものの割合は旧型群3.1%、新型群3.9%( $p=0.23$ )と有意差を認めず、弁における圧較差は旧型群22.3±15.2mmHg、新型群17.5±13.6mmHg( $p<0.001$ )で新型群が有意に低かった。【考察】新型導管の導入により小口径であっても3尖弁化が可能となり、有意に小口径導管の使用症例数が増加していた。一方で、新型導管の弁機能は満足のいくもので、特に弁における圧較差を有意に減少させており、新型導管の有用性が示唆された。